

# 鮮やか色の足跡を描いている

杉本優子さん、湖子さん 母娘で楽しむ絵画の世界



昨年12月に京都で初の個展を開いた、中学生の杉本 湖子さん(金森町・14歳)が、次は日本画家のお母さんと市民ホールで「母娘展」に挑戦することになりました。  
 日時 8月31日(土)～9月8日(日)  
 場所 市民ホール 展示室  
 内容 つながる つなげる 絵を描く 母娘の 展覧会



- ① 新作を描く湖子さん
- ② 湖子さん(右)と優子さん
- ③ 優子さんは日本画を創作
- ④ 湖子さんはお気に入りの母の絵
- ⑤ 個展に出品した作品「dresses」



## 家族の声

絵のことは分からないけれど好きな道を進んでくれたら



剛さん(父)

湖子が京都で個展を開いた時も、メディアに取り上げられた時も、市民ホールで母娘展を開くと聞いた時も「そなんや〜」と大げさに驚いたりはありませんでした。好きな道や興味のあることに夢中になるのも自由なので、妻や娘に頼まれれば協力はするけど、干渉はしないようにしています。湖子がこのまま絵の道を目指すのかどうか、将来のことは分からないけれど、地元で母娘展をするなら、ようさんの人に見てもらえたらと、こっそり知り合いなどに宣伝しています。



クウにはおいしそうなお絵がたくさんに見えるけど、湖子ちゃんには「可愛い」をテーマに描いているんだって。

愛犬のクウ

ボチャも可愛くて、新作のモチーフは「食材シリーズ」になりました。描きたいものは違つけれど好きな道をまっすぐに歩く絆。優子さんは、湖子さんの成長を日本画で描き続けてきました。母娘同じ部屋で寝起きし、肩を並べて創作していました。個展が決まってから部屋が手狭になり、大工の父・剛さんのDIYで湖子さんのアトリエができたそうです。

日本画家である優子さんは、母娘展の準備を進めながら14歳のみずみずしい感性に驚くことも多いとか。「ほんまに絵を描くことが好きで、自由に描いている。大人でもない少女期の感性は貴重なものです。母としても、同じ創作の担い手としても、湖子の作品を見てほしい」と話していました。



湖子さんの制作過程を紹介するインスタグラム

美術科のある高校進学を考えると、初めて技術や美術を意識したのはコロナ禍。持て余した時間に模写をしていて納得できず「つまくなりたい」と思ったそうです。美術科のある高校進学を考えると、初めて技術や美術を意識したのはコロナ禍。持て余した時間に模写をしていて納得できず「つまくなりたい」と思ったそうです。

母娘展が決まった頃、優子さんと買い物に行ったスーパーの食品売り場で見つけたパック詰めのムキエビがフリップリして「可愛い」と感じて手に取りました。湖子さんにとってはレタスやカ

県展不可から個展開催へ初挑戦がうれしい誤算に  
 守山南中学校3年生の杉本湖子さんは、母の優子さん(雅号・竹林 柚手子)が日本画や看板絵などを描いているのを幼い時から見ていました。余った絵具をもらって、覚えていないくらい幼い時から絵を描いていました。

優子さんの人脈で美術商に作品を見てもうう機会をもらえましたが、京都での個展につながったのは湖子さんの実力です。中学生の個展は、メディアにも注目されました。  
 描きたいテーマは「可愛い」想像力をかきたてて  
 水彩やアクリルなど多彩な画材を使う湖子さんの作品テーマは「可愛い」。